

# 中山ラビ 追悼コンサート



7月3日(月)

7月4日(火)

2023年 7月3日(月)4日(火)

開場18:00 開演19:00 終演21:30

Con Ton Ton Vivo

東京都新宿区舟町7  
TEL 03-6274-8383



各日 ¥3,500  
(要ワンドリンク・オーダー)

主催 コラボ玉造  
大阪市生野区中川西 2-15-9



協賛 Project Nyx 新宿梁山泊

協力 大須賀博(ビデオ) 佐々木米市(写真)

ご予約 FAX 06-6731-1699

メール info@tamazo.org

電話 090-8146-1929

(Cメール可)



# 五十年 そして百年

浪花の歌う巨人・パギyan  
(趙博)

僕が中山ラビを初めて見たのは、1973年の『春一番コンサート』でした。サングラスをかけていたと記憶しています。歌っている途中でジャケットを脱ぐと、下に着ていたのはタンクトップ…それが、高校二年生の僕にはあまりにもセクシーに見えたのです。周囲の観客たちも「おおお～」と声を上げました。改めて思い起こせば半世紀前の邂逅、つまり、五十年が経ったわけです。高田渡、加川良、中川イサト、中川五郎、西岡恭造、ザ・ディランIIを初めて生で聴いたのも、この時でした。そうそう、センチメンタル・シティ・ロマンス、はちみつぱい、山下洋輔トリオも!

1973年と言えば、古川豪・中山ラビ・豊田勇造・ひがしのひとし・三浦久の五人が49回も続けた「七夕コンサート」が始まった年でもありました。残念ながら中山ラビが49回目に出演することは叶わなかったのですが、「七夕コンサート」は日本フォーク史の金字塔だと言って過言ではないでしょう。

中山ラビと再会したのは2010年6月、新宿梁山泊第43回公演『ベンガルの虎』です。37年の歳月を経て僕の目の前に突然現れた彼女は、存在感の塊でした。新宿花園神社のテント芝居にこんなにもマッチする歌手がいるだろうか?! 僕は、ただただ度肝を抜かれました。そして2012年8月、吉祥寺シアターで『百年、風の仲間たち』(作・趙博、演出・金守珍)を約一週間公演した際に、中山ラビは毎日のように観に来てくれたのです。「アンタ、よくも私をこんなに泣かせてくれたわね」と、褒められたのか脅されたのかわからないような言葉を掛けられて、僕はこの時初めて彼女が「在日」であることを知りました。

中山ラビと最後に共演したのは、2020年8月『風まかせ人まかせ／続・百年、風の仲間たち』でした。コロナ禍で閉店を余儀なくされるライブハウスの最後のステージに、色々な歌手や芸人が集まるという筋立てで、各回に出ていたゲストは、中川五郎、太田昌国、神田香織、佐高信、松元ヒロ、春日博文、三上寛、木下智恵、フラワー・メグ、鶴飼哲、黒色すみれ、六平直政、小室等の皆さんでした。後々に知ったのですが、中山ラビはこの時、末期癌との闘病の真っ最中だったのです。そんな事をおくびにも出さず、彼女は"中山ラビ"役で、13日間「砂山」を毎日絶唱しました。

奇しくも、今年は関東大震災から百年を数えます。中山ラビがこんな歌を歌っていたことを、不覚にも僕は最近まで知りませんでした。

人が帽子をあげる 呼び声が聞こえる  
たしかこっち向いて にこやかに笑いかける  
だけど だけど おどおどと  
知らんぷりしてすれ違う 身を守るため  
十三円五十銭

夢に脅かされる 井戸がこだまする  
たしかこっち迫って 喉仏が招いてる  
だけど だけど おどおどと  
覗かずに走り去る 身を守るため  
十三円五十銭

唄が聞こえる チンチロケのバラード  
たしかこっち誘って 滑らかに流れる  
だけど だけど おどおどと  
固く閉ざし ひたすら 身を守るため  
十三円五十銭

前歯が欠けてる 扁桃腺が膨らむ  
たしか仲間だったが 目つきが変わったよ  
だけど だけど おどおどと  
吃だけすべて終わりさ 身を守るため  
十三円五十銭

中山ラビが国分寺で『ほんやら洞』を経営していると知ったのは何時だったか、もう忘れてしまいました。京都・今出川の『ほんやら洞』は1972年の開業で、僕も1980年ごろからしおちゅう出入りするようになりましたが、残念ながら2015年1月に全焼してしまいました。「本家」がなくなったのに、皮肉にも「分家」の方は彼女の死後、今現在も存続しています。今回の追悼ライブは『ほんやら洞』が僕たちにくれた合縁奇縁かも知れません。[文中敬称略]

